

つつ増築のワンマンの息のかかる旧邸ではない。焼失前の邸内を見学したことがある。牧野伸顕夫妻の墓は巨大な自然石に彫られていた。牧野は内大臣で昭和11年2月湯河原伊藤屋旅館別館滞在中2・26の河野寿隊の襲撃を受け炎上、幸い裏山へ避難し無事だった。

木堂の墓から50呎の近さに森恪の墓が高さ3呎の石柱で見下ろす如く建つのを見た時は驚いた。政友会幹事長で軍と通じ大陸侵攻を進め木堂の政界復帰に動き犬養内閣書記官長。組閣後木堂は直ちに中国との和平を極秘に進め妥結寸前森が電報を押さえ機会を失った。森は5・15事件の年末12月11日死去。49歳。文字太く深く彫られた墓標が当時の権勢を語っていた。

3年程前バスツアーで最後の青山霊園に寄り戻る際出口の近く左奥に「矢口家之墓」。ひよつとするとと急ぎ側面を見ると夕闇の中で一夫と読めた。5年前この新聞に書いた方の墓に出会えた。矢口一夫は昭和10年代国策研究会を持ち当時陸軍軍務局長の永田鉄山に朝鮮満州視察後の感想を求めたのに対し

関東軍の満州国の内面指導は早く打ち切る必要があり又朝鮮は軍備と外交を除き国内自治を許す方向の必要性を痛感した。

と語り話を聞きながら軍人と話すより大学

教授と語っている感があったとし、永田は同じ頃私に軍人の偏狭独断を匡正する為広く一般人と交際させるよう図りたい、交詢社とか日本クラブ、工業クラブなどへ加入を考えたい。中央部の将校を選抜し入会させるのはどうか、陸軍でも研究するがそれ等のクラブ当事者と相談して貰いたい。と頼まれた事がある。この計画が実現しない内に彼は殺されてしまった。「昭和人物秘録」

松本清張も

彼の政策に一役買ったものに矢次一夫の国策研究会があり、永田は狭い陸軍省内の机上プランだけに頼らず現実的に多方面の知識を吸収しそれを基礎に計画を進めていった。永田は尉官時代から早くも未来の陸相に擬せられていた。「昭和史発掘」

永田夫人重さんはある時呟いたという。

「お父さんが生きていれば東條さんは押さえられた陸軍士官学校で一期下の東條さんは父を信奉していた」征外雄さん談（週刊新潮1995・5月13日号）

周知のごとく永田中將は上諏訪出身昭和10年8月12日陸軍省で執務中いきなり入った相沢中佐に日本刀で襲われ死去した。相沢は真崎教育総監が更迭されたのは永田局長の策謀との怪文書を盲信、凶行に及び翌年5月軍法会議で死刑判決6月上告棄却、7月3日執行された。永田中將の胸像は高島公園に建てられている。（神奈川県中郡二宮町）